

各地で展開する地域活性化活動をサポート

(一財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行ってきており、12年間で91件になります。これらの活動をより効果的にサポートするために、平成20年度から助成を受けた団体の方々が活動成果等を発表、参加者が地域づくりなどについて自由な意見交換をしていた「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。第6回となる今年度は、平成24年度に助成を受けた団体を対象として、7月6日に札幌市内で開催しました。以下はその概要です。

縄文でつながる学びツーリズム

活動名：「縄文」をテーマとしたユニバーサルな「学びツーリズム」と青函交流の推進

かつて縄文の人々が津軽海峡を挟んでつながっていたように、現在の私たちもこの縄文でつながるという縄文文化をテーマとしたユニバーサルな「学びツーリズム」と青函交流の促進を目的とした事業を行いました。

縄文をテーマとした青函周遊旅行プラン提供の実現に向けたヒアリング調査を、昨年11月中旬に、三沢市、東北町周辺で活動している日本風景街道の「奥州街道と縄文のみち」関係者と行いました。奥州街道さんは14の団体で構成されており、遺跡見学会や縄文施設の見学会を組み合わせたツアーを定期的実施しています。実際に発掘現場に携わっている人の説明が何よりも魅力的だとうかがい、今後の取り組みに大変参考になりました。

八戸市の是川縄文館と三内丸山遺跡の縄文時遊館では、修学旅行をターゲットとした体験メニューの創出

に力を注いでいるということが分かりました。

八戸の市営バスと南部バスの交通事業者さんのヒアリングでは、八戸駅から観光地が分散し、バスを利用している客が少ないため観光に特化した路線がほとんどないということでした。バスの運賃と施設入場料を組み合わせた企画乗車券の導入には前向きな意見をいただきました。今回のヒアリング調査ではいくつかの課題が残りましたが、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館、三内丸山遺跡・縄文時遊館、そして函館市縄文文化交流センターを学び観光のエリアと位置づけて、今後、青函交流を推進していきたいと思います。

次に、11月下旬にユニバーサルな縄文観光の実現に向けた人材育成のための研修ツアーを、函館バリアフリーボランティアプロジェクトと函館市縄文文化交流センターのスタッフとが連携して行いました。研修では、縄文文化の概要についての座学と、車いす利用者や視覚障害者に対する介助方法の実習を実際に館内を見学しながら行いました。また、縄文文化をテーマとした学びツーリズムの推進として、函館市の交流人口の拡大、地域活性化を図ることを目的に、JR東日本が企画する大人の休日プランとの連携による、函館市縄文文化交流センターの案内チラシを作成し、函館駅周辺の観光案内所やホテルに設置しました。

今後は、関東圏、札幌圏の縄文ファンによる交流人口の拡大を目指すために、函館まで延びる新幹線を基軸に、JR東日本の「大人の休日倶楽部」やJR北海道の「悠遊旅倶楽部」などの商品と併せて、バスと函館市縄文文化交流センター、是川縄文館、縄文時遊館、それぞれをダイナミックにリンクしながら、広域に連携した「縄文を巡る青函パック（仮称）」による、縄文遺跡群への周遊プランの商品化を目指していきたいと考えています。



坪井 睦美 氏
シーニックバイウェイ北海道函館・大沼・噴火湾ルート

地域資源のあらたな課題

活動名：「トカプチまる得めぐり券」でめぐる秋の十勝ガーデン&スイーツモニターツアー

トカプチ雄大空間では、「ライフコンシェルジュ（地域風土アドバイザー）」と称した地域ボランティアにより、十勝の魅力を地元目線でお客さまにおもてなす活動を行っています。また、「トカプチまる得めぐり券^{※1}」という周遊券を発券しており、これらを活用し、札幌圏のお客さまを対象にしたモニターツアーも実施しております。

本ツアーは、女性を対象とし、DM、北海道新聞札幌版などで募集し、札幌圏から24名、東京から2名の参加がありました。

ツアー1日目は、札幌駅を出発し、バスで道東道を利用し十勝に入りました。まず、柳月スイートピアガーデン（音更町）で菓子を堪能し、その後、幸福駅、紫竹ガーデン、帯広競馬場（帯広市）に立ち寄り、「とかちばん馬まつり」「馬の資料館」「とかちむら^{※2}」を見学しました。2日目は、真鍋庭園（帯広市）、まきばの家（池田町）を訪ね、まきばの家ではシードッグショーを見学しました。新嵐山スカイパーク（芽室町）で昼食をとり、十勝を後にしました。

ツアー終了後に実施したアンケート調査では、道東道の開通により札幌圏における十勝の認知度が高くなっている反面、各施設での対応がまだ充足されていないという結果になりました。また、十勝の食への関心は年々高まっていることから、地元グルメの提供には「量より質」を一考する余地があると考えられます。

また、「まる得めぐり券」に関しては、より分かりやすい名称と、使用方法が今後の課題となりました。このような結果を踏まえ、平成25年度は名称を変更し、使い勝手の良いチケットに見直したところ、販売数が大きく増加しました。

ライフコンシェルジュは強みを生かした活動が評価・周知されたことにより、多方面でガイド活動が実



松浦美穂子 氏
十勝シーニックバイウェイ
トカプチ雄大空間

施され、ビジネス需要が高まる可能性が増大しました。今年度より帯広駅構内のエスタでもライフコンシェルジュの派遣を行うなど、より地元に着した活動を行っています。

現在、さまざまなコンテンツが多数ある十勝観光において、全体的に十勝の認知度や食の関心・期待度は高まっていますが、それに対して地元の受け入れ体制がどのような提案をしていけるかが今後の課題です。

地域ならではの体験活動型観光

活動名：東十勝ロングトレイルを活用した地域活性化事業

シニア層の健康志向や自然志向の高まる中、浦幌・豊頃両町の東十勝に点在する海浜、奥深い自然、産業遺産や地球の歴史を物語る地層などの観光資源を線でつなぎルート化し、体験・滞在型観光により交流人口の拡大を目指そうと、平成21年に「東十勝ロングトレイル協議会」が発足しました。「ロングトレイル」は、自然の中を歩く旅としてアメリカで生まれ、欧米ではアウトドアカルチャーとして定着しています。

当協議会では、2年間の資源調査やルート検討により、地域資源の特色を「森」「海」「川」でまとめた三つのルートを設定しました。「森のルート」（3km、5km、10km、16kmコース）は、いん石落下による恐竜絶滅を示すK/T境界層^{※3}や旧浦幌炭鉱、馬髭岳、留真温泉をつないだ森林散策ルートなどです。「海のルート」（5km、10km、20kmコース）は、昆布刈石展望台やパラグライダー発着場など海風を感じる海岸段丘から300種が咲き乱れる豊北原生花園をつないだルートや厚内駅までのルート。「川のルート」は、歩きより野鳥観察会に特化し、オジロワシ、オオワシ、タンチョウ、ヒシクイ、マガンの5種類の天然記念物が見られる11月中旬と3月下旬に、日本野鳥の会十勝支部と共催でバス観察ツアーを開催しています。毎年、「非日常体験、^{こたけ}拘りの食」をテーマに各ルート2回ずつ6回のツアーを開催、23年度285人、24年度215人の



伊豆倉寿信 氏
東十勝ロングトレイル協
議会

※1 トカプチまる得めぐり券

トカプチ雄大空間内の施設をお得にめぐれるチケット。チケットは「ガーデン+スイーツ・フード・ドリンク 1,200円」、「温泉+フード・ドリンク ¥2,000」の2種類ある。

※2 とかちむら

ばんえい十勝の賑わい創出事業の一環として、2010年8月に帯広競馬場にオープン。産直市場、キッチン、スイーツ&セレクトの三つのゾーンで四季折々の十勝の魅力を楽しめる。

※3 K/T境界層

約6,550万年前の中生代と新生代の境目に相当する地質年代区分の用語。

参加がありました。

現在も、ルート整備や新しいルートの検討などに取り組んでいます。24年度は「森のルート」旧浦幌炭鉱（市街地約2.5km）に新たに5基の標識を設置しました。最盛期には3,600人が生活し活況を帯びたものの昭和29年に閉鉱し、今では^{ずいどう}隧道跡や廃アパートを残すだけで、「未来の森」（道有林）として、カラマツやトドマツ、シラカバなどが植林されていました。当協議会は、当時の写真を載せた標識を22年度に27基、23年度に5基設置し、現在は37基の標識が当時の炭鉱集落をほうふつとさせています。

今後の取り組みと課題は、集客を管外、道外に広げること。また、協議会の受け皿としての運営母体の模索です。

地域資源を活かした、体験による地域活性化

活動名：地域資源を活かした新たな冬の体験型スポーツイベントの創出及び移住体験モデル事業による地域活性化

清里町は世界自然遺産知床に隣接していますが、観光産業としては特徴的なものはなく、自然景観スポットとして「斜里岳と農村景観」「裏摩周展望台」「神の子池」などがあげられます。特に「神の子池」はパワースポットとして人気が高く、年間約5万人が訪れています。



奥山 英明 氏
NPO法人きよさと観光協会

当町は夏のイベントは多いのですが、冬になると特に目立ったものがない状況もあり、今回の事業を機会に、冬に何か「まちおこし」ができないかということで、三つの事業を計画いたしました。

「スノートレイルラン」は、雪の中をかんじきか、スノートレーニングシューズで走る競技です。町が管理しているパークゴルフ場をメイン会場として、山の中を約3km走る競技でしたが、万全な準備も空しく、当日は猛吹雪で中止となりました。

「原生林スノーシュートレッキング」は、冬期間通行止の林道を、片道2km先の神の子池までスノーシューで往復するものです。真っ白な雪とコバルトブ

ルーの湖面に参加者は感激していました。

また、当町では3棟の住宅を賃借し、「移住体験事業」を実施しています。7月から9月は人気が高く予約で満室となっていますが、冬期間は「北海道は寒い」等の理由で人気がありません。そこで「住んでみたい北海道推進会議」と連携しパンフレットとホームページで募集しましたところ、応募期間2週間で5組の応募があり、抽選で2組に参加していただきました。自動車学校での冬道の安全運転講習、神の子池へのスノーシュートレッキング、流水の上を歩く流水ウォーク、流水観光船オーロラ号の乗船等、素晴らしい冬の北海道を体験していただきました。

清里町は官民一体による「協働のまちづくり」として「花と緑の交流のまちづくり」に取り組んでおり、10年を経過いたしました。春から秋まで、清里町の商店街や住宅街は「花」でいっぱいになります。植樹帯やプランターは、花の里親制度など、沢山の住民の協力により管理されています。

また、「シーニックの道路清掃」は、東オホーツクシーニックバイウェイが主催し、道道摩周湖斜里線約15kmの車道と歩道の清掃作業を、8年前から官民協働で毎年実施しています。

「シーニック活動」といっても、シーニック団体以外の、建設業協会約70人、役場職員約60人、ロータリークラブなど、町民約160人が参加しています。

「特産品の開発」では、清里産の春まき小麦「春よ恋」を製粉し観光協会が販売、その小麦粉を使用し「神の子池ラーメン」「清里冷麺」も販売しています。

「オホーツク・マルシェ」は、地域の農業者や加工業者等の参加により、主に地場産の農産品や農産加工品を販売しており、東オホーツクの道の駅などを中心に年間7～8か所で開催しています。

当観光協会としては、今後も新しい事業にチャレンジし地域振興に努めていきます。

また、地域の皆さんと、楽しいまちづくりを実施すべく、自治体はじめ商工業者、農業者など、各団体を巻き込みながら、地域活性化のため事業を実施していきたいと考えます。

農業農村の振興と共に豊かな地域環境の保全

活動名：篠津地域農地農村の風土生態的景観の体系化

石狩川と当別の山に囲まれた篠津地域は、泥炭地で非常に湿潤で、人間が住み、農業のできるようなところではありませんでした。明治20年代まではただの原野でした。昭和28年ころになりますと、大体の区画はできて運河も一度は掘られています。



梅田 安治 氏
NPO法人篠津泥炭農地環境保全の会

篠津は初期は土地条件の良いところから造成していたので、お米の収量はそんなに悪くありませんでした。戦後の開発は条件の恵まれないところにも及び、お米の単位収量は低下しました。その後地元の努力や土地改良事業、開発事業の発展で収量は石狩川水系での平均値よりも上になり、泥炭地でも水田・農地として安定してきました。

制度としての再生事業ができる7、8年前、自然環境保全事業を私的に提案しました。農村地域はお米など農作物を作っているだけでなく、自分たちの生活の場でもあり、積極的に自然を取り込んで関わっていくことで生産生活の空間として充実したものとなるということです。

地域全体の植生、動物などの調査をし、地域の自然環境、そして水田や畑、水路、防風林などの施設とどう絡んでいるのかを全体的に調べています。さらにその中で、普通の農作物だけでなく、より自然植生に近い、ワイルドライス^{※4}やマコモ^{※5}というものの可能性を求めて実験的に栽培しています。

地域の方々は村としても活動していますが、札幌に近いこともあり、それぞれが活発に活動しています。そういうときに、活動をする器、すなわちこの地域を農村空間としてどう形成していったらいいのか、形成するといっても農村は都会と違います。それぞれの農家が営農して農作物を作っている。そういうところで、どうやって見極めていくかです。篠津中央土地改良区とその周辺を一つの地域として地域内の33戸の農家にお願ひして、それぞれ代表的な作物を出していただき、平成24年における各月の旬ごとに農作業暦を記録し、

その都度、ほ場周辺の状況・見え方を写真で記録してもらいました。そこから季節ごとの地域の農村空間としての状況・見え方が分かってきました。

外来者を迎えての農業体験は多くの農家がやっています。「道の駅しんしのつ」は「たっぶの湯」という温泉の宿泊施設と一緒にあります。宿泊する方にそれぞれの農家の農業体験の案内がサービスされています。田植え体験、稲刈り体験などは私どものNPOも関係していますが、非常に盛況です。田んぼの稲より子供の数が多いのではないかとというぐらい札幌からたくさん子供が来ます。そのときに稲刈りだけでなく、金魚すくい、売店、学習会などいろいろなことをやっています。ここに来ると学校の宿題が一つ済むという感じです。また、ここは幸にしんのつ湖という河跡湖がありますので、冬にはワカサギ釣りも温泉とともに盛況です。

地域の活動そのものではないですが、活動のベース、活動の枠・空間を形成することが刺激になって、地域の方々が活動を広げていければと願っています。

村民協働プロジェクト「特化した食づくり」

活動名：「地場産ヨーグルト」で村づくりプロジェクト

私たちは地域の環境上、地域を愛せるような、ここならではの観光、地域おこしをしようということに特化しています。

役場、観光協会、女性団体、酪農家など、村民全員が協力して何かを作ろうというプロジェクトを立ち上げ、ヨーグルトを料理に使ったらどうなるかを1年かけて検証しました。メンバーは、農協、役場、レストラン経営者など、男女を問わずさまざまです。試食会を4回し、視察にも1回行きました。

ヨーグルト料理の試食会では、ヨーグルトに特化した国をピックアップし、トルコ、中東の料理をまねして、地場産品を使ってやってみました。そのうちに、自分たちの料理にヨーグルトを加えられるのではないかとすることにシフトしていき、前菜からメイン



服部 政人 氏
NPO法人美しい村・鶴居村観光協会

※4 ワイルドライス (wild rice)
イネ科の一年草。マコモの一種、アメリカマコモともいわれる。アメリカインディアンの食糧とされ、現在も自然食品として需要がある。

※5 マコモ (真菰)
イネ科の多年草水旱。マコモの種子は食糧として使われていた。

ディッシュ、デザートまで、コースで20種類ぐらい作りました。

十勝の清水町「あすなろファーム」に視察に行きました。ここでは、乳製品、ヨーグルト、プリンなどをかなり作っています。規模は大きく商品数も多く、自分たちとはあまりにも違うと思っていましたが、いろいろなノウハウを教えてくださいました。

地場産ヨーグルトの料理メニューは、「豚肉とヨーグルトのパテ」「鶏肉とアボカドのセルクル」、洋風な料理をレストランで女性何人かで作りしました。「茄子とトマト・クスクスのサラダ」ではクスクスという世界最小の Pasta にもヨーグルトを入れて作りしました。「中東のチーズ・ラブネ」は、ヨーグルト自体の水分を取ってしまうので、最後はチーズみたいになって、そのままでも料理になるぐらいです。ヘルシーです。これにジャムがあったら、一つの商品です。「ポテトのヨーグルト・ベーニェ」「鶏肉のソテー・ヨーグルトソース」。「さんまのヨーグルト&赤ワイン煮」「アサリとサーモンのヨーグルト・パエリア」は、サンマ、アサリで釧路との地域連携が図れるのではないかと考えて作ってみました。「全粒粉とヨーグルトのパン」は水の代わりに飲むヨーグルトを入れて作ったり、「ヨーグルトとクリームのカレー」を作りました。

試食会でのアンケート結果は、ヨーグルト自体がよいアイテムで皆さんに好まれているので、よかったと思います。

私たちはヨーグルトで料理を作って、開発できたということでしたが、いまだ工房があるわけでもないし、販売できるヨーグルトを持っているわけでもありません。観光的には食は絶対外せないもので、根釧の酪農地帯に来て何のイメージがあるかといったら、やはりチーズ、牛乳などの乳製品です。農村の地域づくりの観光のアイテムであることは間違いないです。観光業者、宿泊業者、体験業者、飲食店が連携できるものを作るべきだと思います。農と商が連携するという意識づけに非常に意義があると思います。そして、地域の連携です。長期間、ゆっくり、のんびりと泊まれる場所であること、地域でなければできない体

験をすること、ここに来なければ食べられないということ、私どもの言う「新しい身の丈の観光」になっていくのではないかという検証ができました。

駅だけではなく中心市街地全体も見据えた「まち再生！」を目指す

活動名：いわみざわ駅まる。

「いわみざわ駅まる。」が誕生したきっかけは、2001年に古い岩見沢駅舎が全焼し、09年に新しい駅舎ができ、そして10年に「岩見沢市観光振興ビジョン」を岩見沢市と市民団体とが連携して策定したことです。JRグループの中で初めて設計コン



平野 義文 氏
いわみざわ駅まる。実行委員会

ペで作られた駅です。そのテーマは「まちの顔として永遠に変わらぬ価値を持つもの」「まちと人をつなぐ、まちづくりの中核になりうるもの」です。「岩見沢市観光振興ビジョン」の策定委員会には、「バラ部会」「駅部会」「たから部会」の三つの部会が置かれ、私は駅部会のリーダーとしてかわり、レングプロジェクト事務局の代表もやっていたという縁で、この両方の団体が合体したのが「いわみざわ駅まる。」です。

岩見沢のまちを再生していくのに、これまでの記憶を無視してはいけないと思っています。岩見沢は鉄道の拠点で、小樽から海産物が行商列車に乗って岩見沢駅前に店を開き、それを目当てに美唄、歌志内、砂川、夕張などの産炭地から買い付けに来て、また戻っていく。岩見沢はそんなまちでした。モノだけでなく、情報や文化といったものも、いったん岩見沢に集まって、また各地へ散っていくというハブの役割があったことが分かってきました。そういう今までの歴史の延長線上に、次の新しいまちづくりをやっていこうというのが、我々の今の考え方です。「岩見沢は、いつの時代も駅がはじまりである」というのは、人が来る前に駅が来ているという歴史を踏まえ、これからの地方都市の再生もまた駅から始めよう、というのをキーワードにしています。それが「ひとあつまる。まちはじまる。」

の「いわみざわ駅まる。」ができたきっかけです。

年に1回、駅を中心とした大きなイベントを開催しています。その中では特に「鉄道文化の確立」を目標に掲げ、「鉄道 EXPOinいわみざわ」を開催しています。駅のすぐ近くのレンガ造りの19世紀の建物の中でライブを行いました。鉄道マニアにはものすごく価値のあるものが岩見沢にいっぱいあるらしくて、そういうものを持ち寄って、本当に素晴らしいものには「岩鉄マーク」という認定証を授与する事業をやっていきます。

今は毎月1回、勉強会を開き、年に1回の事業の組み立てをしています。18歳の大学生から60歳後半の男性や女性が、全員があくまで個人として参加しています。こういった取り組みが非常に珍しいということで、4月に出された季刊誌ホッカイドウ・マガジン『カイ』では特集をしてくれています。

今後のビジョンです。ボランティア活動には瞬発力があっても持続力がないのです。そんなことから、まちづくりを仕事にできるような人材を確保したいと思っています。改めて、駅だけではなく中心市街地全体も見据えた中で「まち再生！」を目指していきたいと思って活動しています。

地域カフェ、情報発信

活動名：占冠地域カフェ運営と情報発信

平成23年に、どうすれば地域カフェができるか検討しようということになり、近くの平取町の地域カフェを視察に行きました。それから月に1、2回集まって話をし、やるとしたら空き家しかないということを見て歩き、役場にも近く、高齢者が歩いてこられる場所ということ

で、役場の向かいの2階建ての空き家を選びました。空き家の改修事業は、メンバーができる一番簡単なペンキ塗りから始まりました。24年の6月から始まった改修は10月半ばに完成し、10月28日に地域カフェ「ほっこてぶくろ」の落成式を行いました。翌11月の3日、4日が村の文化祭だったので、3日を正式なオープン



岡崎 善二 氏
NPO法人山ほたる

日にしました。オープニングにはもちつきをして、きなこごまのもちを村の人に食べてもらい、喜んでいただきました。4日には、初めてのイベント「おいしい珈琲の入れ方教室」^{コーヒー}を行いました。若い人から高齢の人まで、自前でポットを持ってくる人もいました。たくさんの人で賑わい、最初のイベントとしては成功したと思っています。

保育所が近くにあつて、保育所のお母さん方の秘密の会がここで行われたりします。子供たちにも楽しい時間ができればということで、12月には絵本の読み聞かせ会を行いました。

25年2月の情報発信を兼ねた「富良野の画家今井克氏と語る」は、街中ギャラリーとして、郵便局、信金支所、「ほっこてぶくろ」、道の駅の5カ所を使って村の中を巡ってもらおうというものです。これは最終的にインタビューの番組も兼ねていて、今井氏から話を聞いています。

このイベントの開催中に音楽会ができればということで、占冠村出身で札幌のススキノ近くで路上ライブをやっている兄弟デュオ「ヴィレッジ」に村に帰ってきて歌ってもらうことになりました。道の駅「自然体験しむかっぷ」に地元の方を中心に100人近く集まって楽しんでいただきました。

今年度は、北海道の集落支援事業の一環として、インターネット初級者講習会を行います。SkypeやGoogle+で自分たちで映像番組を作って放送する「住民ディレクター」というグループが全国的にあります。そういうのを企画しています。

占冠村はほとんどが森林なので、間伐材や木のつるを使ったクラフト講座、地元食材を生かしたスイーツ講座、絵本の読み聞かせ会を継続してやりたいと思っています。普通に地元の人がやって来る、そんな地域カフェにしていきたいと思っています。